

集つて(来て)ほしい。この α は「話者に近づく」方向を示していると解釈し、 β は、その α と祈求の γ が凝集した形式であると考へる。この形態は現在四川省の西北地域で話される羌語に類似して、両言語の系統的なつながりの検討が課題となる。

八、今後、西夏語の研究は、テキストの読破と共に更に進展する。しかし二〇〇年以上続いた西夏語はそれ自体変化しているのである。たとへば上に述べた六つの方向を示す接頭辞は、やがて特定の動詞には特定の接頭辞が固定的に使われ、しかも過去時制を表現する機能に変わつて来ている。それ故、各テキストの成立年式の決定が重要になる。九、最後に、知識の体系として見た西夏文字の特徴について述べた。

第四二六回 六月一日(火)

アルファベットの起源と発展について

東洋文庫研究員 薮 勇 造
東京大学助教授

アルファベットとは、当該言語の有する音素の一つ一つ

に異なつた記号(文字)が対応するという、一字一音の原理に基づく表記体系のことをいう。現在世界で用いられている文字は、漢字及びそれから派生したものを除くと、あとは殆どすべてがアルファベット系で、しかもそれらは現在の形こそ違へ、起源は一つであると考えられている。ではその起源は何時何処にあり、そこからどのようにして諸系統が派生したのか。この問題に関する近年の研究動向を紹介するのが本講の趣旨である。

一般にはアルファベットはセム系の民族によつて創始されたというのが通説となつてゐるが、実は古代エジプト人が既に二四の子音文字からなる所謂「エジプトのアルファベット」というものを有していた。しかし表意文字を中心とするエジプト語の表記体系の中で、この子音文字群は補助的な機能しか果たさなかつたため、普通エジプト人はアルファベットの創始者とは見なされていない。一九〇五年にピートリーがシナイ半島で発見した所謂「原シナイ文字」(紀元前二千年紀中頃)がアルファベットと判明したとき、人々はこれこそ最古のアルファベットに違いないと考へた。しかしその後かつてカナーンと呼ばれた東地中海沿岸部より同種の文字の発見が相次ぎ、しかもそれら(原カナーン文字と呼ばれる)のうちの幾つかは原シナイ文字より若干古いのではないかと言われる。そこで現在のところ

ろは、アルファベットの原型が成立したのは紀元前二千年紀前半の東地中海沿岸で、おそらくエジプトとも活発に取引を行っていたこの地方の商人が、より実用的で簡便な表記法を必要としたところに新文字成立の歴史的要因があった、と考えるのが最も無理のない解釈のようである。

この原アルファベットは、やがて北セム系と南セム系に分化した。アルファベットに大きくこの二系統の区別があったことは、文字順・文字の形状・文字の名称などに明確な違いが認められることから、まず間違いないと考えられている。特に近年、南セム系アルファベットの存在とそれ独特の文字順の普遍性を実証する発見が相次いだことよって、この方面の研究は大いに進んだ。そしてそれぞれの系統の内部に、メソポタミア文明の強い影響を受けて楔形文字を使う系列と、絵文字を簡略化した線状文字を使う系列の対立があったことも明らかになった。北セム系の楔形文字アルファベットについては、一九二九年に北シリアのラス・シャムラで発見されたウガリト文字（紀元前一四世紀）の解説を通じて、早くから、その存在が知られていたが、南セム系のそれは、南パレスチナのペート・シエメシユから一九三三年に発見されていた粘土板の楔形文字群（紀元前一三世紀）が、実は南セム系アルファベットの文字表であることが、ごく最近明らかになるまでは知られて

いなかった。セム系アルファベットの内部にはこの他、フェニキア文字のように文字数が二二かそれよりやや多い程度のシヨート・アルファベットと呼ばれる種類と、南アラビア文字のように文字数が二九かそれよりやや少ないロング・アルファベットと呼ばれる種類の違いがある。これら諸系列相互の関係は極めて入り組んでいて、それをどう解きほぐして、成立して間もない紀元前二千年紀後半のアルファベットの発展の過程を如何に説明するかを巡って、現在論争が行われている。

南北いずれの系統においても、さらに分化を遂げて後世に至るまで使用され続けたのは、線状文字の方である。北セム系では、フェニキア文字から派生したギリシャ文字がヨーロッパ系諸アルファベットの母体となった。子音字だけで構成されていたフェニキア・アルファベットに母音字を付け加えて印欧系の言語の表記を容易ならしめた功績は大きい。また同じくフェニキア文字から派生したアラム文字は、アジア系の実に多くの文字の母体となったことが知られている。他方南セム系においては、線状の原アラビア文字から派生した多くの文字が、アラビア半島各地で使用された。特に高度の文明を發展させた南アラビア（現在のイエメン）では、金石文用の極めて整った大文字書体を見ることができ、それに加えて近年、日常生活の中で用い

られた書写用小文字体が発見されて注目を浴びている。しかしこの系列で現在まで生き残ったのは、アルファベットから音節文字への変換を遂げたエチオピア文字だけである。この変換にインドのブラーフミーの文字が影響を与えたと推量する者もいる。

アルファベットに限らず文字の起源と発展に関する研究は、ただ単に文字形の変化や伝播の過程を追うだけではなく、それらの背景や要因を歴史的に考察することによって、一層の裏りを期待することができるのではなからうか。

第四一七回 六月八日(火)

甲骨文字の「解説」

東京大学教授 松丸道雄

一九世紀末に甲骨文字が発見されて以来、早くも九〇年以上が過ぎた。その間、多数の研究者の研究によって、殷代史の解明が飛躍的に進展したものは周知の通りであるが、その基礎となったのは、甲骨文字そのものの「解説」

にあった。甲骨文発見後、かなり短時日の間にその内容が読み解かれたのであり、それは、宋代以降の永い研究蓄積をもつ古文字研究、とりわけ、金文研究の成果があったためだ、と考えられている。

そのことにもとより誤りはないのだが、古文字、古文獻の「解説」といっても、音標文字によって表記された古文獻を解説する場合と、漢字のような、原理的には一語一字をもって表記する、いわば「多字文字」を対象とする場合とでは、その「解説」の方法および内容が根本的に相違する。かつ、甲骨文の場合、その形体上の変化はあるにしても、系譜的に辿られる漢字が、今も用いられている。

数年に及ぶわが研究所のプロジェクトにより、この甲骨研究史九〇年間に甲骨文字各々の読解について出現した諸説を蒐集する作業を行ない、約二千五百種の著作・論文等のうちから、約三万枚のカードを作成することが出来た。これを、整理・編集し、全甲骨文字に対して、従来の研究者が、どのような解を与えたかを検索しうる書物を刊行すべく努力し、目下作業は最終段階に来ている(松丸道雄・高嶋謙一共編『甲骨文字字釈総覧』東京大学東洋文化研究所・東大出版会刊)。これは一面で、各字についての解説史といった性格をも兼有することになる。その過程で実感された、甲骨文解説上の問題点について、一、二、挙例して